

第十章 光る源氏の物語 密通露見後

[第一段 紫の上、女三の宮を気づかう]

*つれなしづくりたまへど(殿は平静を装っていらっしゃるが)、もの思し乱るるさまのしるければ(心此処に在らずの物思いに悩む様子がはっきりしていたので)、女君(夫人の紫の上は)、消え残りたる*いとほしみに渡りたまひて(自分が命を取り留めた貴重さに殿はこの二条院にお帰りなされたもので)、「人やりならず(帝や朱雀院への気兼ねではなく、自分の気持として)、心苦しう思ひやりきこえたまふにや(宮の御体調に御同情申しなさっているのだろうか)」と思して(とお思いになって)、 *「つれなし作る」は<平静を装う>。この主語は源氏殿のようだが、殿が二条院に着いた、という部分の描写が省かれていて、とても意味が取り難い文だ。 *「いとほしみ」は「いとほしむ(「いとほし」と思う)」の連用名詞で<「いとほし」という思い>。「いとほし」は「いとふ(愛ふ、大事に思う、大切にすること)」の終止形「いとふ(大切にするという概念)」を「し(という)」で形容詞化した「いとふし(大切にするという概念という)」の音変化と見做す。で、「いとほしみ」が<大切にすることという思い>という意味になって、その「大切にするという気持」という言い方は<貴重に思う→貴重さという評価>のこと、かと思う。

「心地はよろしくなりにてはべるを(私は気分が良くなっておりますので)、かの宮の悩ましげにおはすらむに(あちらの宮が御不調でいらっしゃるのに)、*とく渡りたまひにしこそ(早くお戻りになったのは)、*いとほしけれ(気兼ねされます)」 *「とく渡りたまひにし」は<源氏が六条院から二条院へ戻ってきたこと。>と注にある。 *「いとほし」の「いとふ(大事に思う←とても強く思う)」は此処では<気懸かりだ、懸念される、心配だ>という語用で、上の宮に対する気兼ねなのだろう。

と聞こえたまへば(と殿に申し上げなさんと)、

「さかし(それは確かに)。*例ならず見えたまひしかど(宮は変調にお見えでいらしたが)、異なる心地にもおはせねば(特に重態でもいらっしゃらないので)、おのづから心のどかに思ひてなむ(大丈夫だろうと安心しています)。 *「れいならず」は<普通ではない>で、これが体調のことなら<病気だ>という言い方になるようだ。が、殿は上に宮の体調を<病気だ>と言ったとは思えない。宮は妊娠だと、殿にははっきり分かっていたのだから。では、この「例ならず」が<懐妊>を意味するかと言えば、場合によってはそう意味する言い方でもあるようだが、宮の懐妊を上には知らせる意味合いの家族構成に関わる上の立場に影響する重大さを思えば、それを知らせるにはそれなりの段取りが必要だろうし、此処では「見えたまひしかど」と曖昧表現で済ませているので、文字通り<いつもとは違う御体調>を示しているように見える。

内裏よりは、たびたび御使ありけり(帝からは度々お見舞いのお使者があつて)。今日も御文ありつとか(今日もお手紙があつたとか)。院の、いとやむごとなく聞こえつけたまへれば(朱雀院が帝に宮のことを特に気遣うようお頼み申しなされたので)、上もかく思したるなるべし(帝もそうなさっていらっしゃるようです)。すこしおろかになどもあらむは(私が少しでもお世話を疎かにしようものなら)、こなたかなた思さむことの(その御二方の御心証を害しそうで)、いとほしきぞや(思い遣られます)」

とて(と殿は)、うめきたまへば(溜息をお吐きになるので)、

「内裏の聞こし召さむよりも(帝がご心配なさっていることよりも)、みづから恨めしと思ひきこえたまはむこそ(宮ご自身があなたを薄情に思い申しなさる事が)、心苦しからめ(気懸かりです)。*我は思し咎めずとも(宮ご自身では気に咎めなさらなくても)、よからぬさまに聞こえなす人びと(あなたの悪口を申す女房たちが)、かならずあらむと思へば(必ず居るだろうと思えば)、いと苦しくなむ(とても不都合です)」 *「我」は<女三の宮をさす。>と注にある。

などのたまへば(などと紫の上が仰ると)、

「げに(確かに)、*あながちに思ふ人のためには(私が真っ先に思うあなたについては)、わづらはしき*よすがなけれど(あなた自身のことを思って、面倒な縁者のことは考えないが)、よろづにたどり深きこと(あなたは何ごとにも思慮深くて)、とやかくやと、おほよそ人の思はむ心さへ思ひめぐらさるるを(あれこれと多くの人の思惑までご心配なさるというのに)、これはただ(私はただ)、国王の御心やおきたまはむとばかりを憚らむは(帝が宮を御配慮なさっていることばかりに体面を気遣うというのは)、浅き心地ぞしける(了見が狭い気がしますね)」 *「あながちに思ふ」は敬語が無いので話者とは即ち源氏殿が主語、なのだろう。で、「あながち」は<偏に、無闇に>という語用が多いようだが、是は恐らく紫の上が言った「人やりならず、心苦しう思ひやりきこえたまふにや」に呼応した言い方で、「あながちに思ふ」は<自分から進んでと言えば、私自身が真っ先に気に掛ける>という意味合い、と取って置く。で、「あながちに思ふ」その「人」は聞き手の紫の上らしい。 *「よすがなし」は「縁無し(親戚がいない)」と「寄す処無し(よすかなし、周辺事情を考えない)」の複意、なのだろう。

と(と殿は茶化した物言いで)、ほほ笑みてのたまひ*紛らはず(笑って宮の密通と懐妊に対する懸念を誤魔化しなさいます)。 *「紛らはず」のは宮の密通と懐妊について殿が思い悩む対処の仕方、に違いない。紫の上は、殿が思い悩んでいる様子を、宮の御体調が悪いのではないかと推察している。まさか、これほどの不始末を打ち明けようもない。注には<苦笑して問題の本質には触れない。『集成』は「苦笑して本心には触れずにおしまいになる」。『完訳』は「苦笑して言い紛らわしていらっしゃる」「密通への複雑な思念を隠す気持」と注す。>とある。

渡りたまはむことは(六条院に帰ることについては)、

「もろともに*帰りてを(一緒に帰れば、)。心のどかにあらむ(安心できますから)」 *「帰りてを」は渋谷校訂で句点が置かれている。そして「もろともに帰りてを」の文意については、注に<「帰りてを」の「を」は、間投助詞、詠嘆の気持。>とあり、訳文は<一緒に帰ってよ。>とある。「てを」が<てよ>の古い言い方、ということだろうか。だとしても、いや、だとしたら、「てを」という言い方の元々の思いに立ち返って言い換えるようにしないと、私には殿が此処で懇願口調になる文意が分からない。「帰りて」の「て」は手段や条件を提示して述辞を待つ接続助詞で<帰ることで>という言い方に見える。で、「を」は更に説明の接続助詞で<～をしたならば>という意味なのではないか。であれば「帰りてを」は、「帰る」の未然形「帰ら」に条件提示の接続助詞「ば」が付いた主体的な仮定文の「帰らば(帰ったならば)」を客観的な論理文型で言い表したものの、だろう。ところで、「帰らば」は現代語では<帰れば>で同義だが、古語では已然形の「帰れば」は主体文ではなく<帰る場合には>という一般論となって意味を違えるようだ。つまり「帰りてを」は、主体文ではあるものの、本来は冷静な論理判断による結論という体裁で説得力を持たせようとした物の言い方であり、それが使い古されて今日では<～してよ>という懇願口調に墮

したもの、なのかも知れない。であれば、「を」は接続助詞なので句点ではなく読点で下の述辞を待つ文意、と取るべきものに見える。

とのみ聞こえたまふを(ということだけを殿が申しなさるのを)、

「ここには、しばし心やすくてはべらむ(私は此処でもう暫くゆっくりして居たいと存じます)。まづ渡りたまひて(あなたは先にお帰りになって)、人の御心も慰みなむほどにを(あちらの方のご気分も和らぐでしょうから)」

と(と紫の上が)、聞こえ交はしたまふほどに(応えるという会話をなさるようなことで)、日ごろ経ぬ(数日が過ぎました)。

[第二段 柏木と女三の宮、密通露見におののく]

姫宮は、かく渡りたまはぬ日ごろの経るも(姫宮は殿がこのようにお見えにならずに何日も過ぎるのを)、人の御つらさにのみ思すを(殿の薄情とばかりに御思いなのを)、今はわが御おこたりうち混ぜてかくなりぬると思すに(今は自分の御失敗の所為もあってこうなっているとお思いになると)、*院も聞こし召しつけて(父君の朱雀院までもこの事情をお知りになることになって)、いかに思し召さむと(如何御思い為さるだろうかと)、世の中つつましくなむ(世間が恐ろしく身を包み隠したくなります)。 *「院」は「聞こし召す」や「思し召す」という最上敬語遣いからして父院の朱雀院と知れる、ということのようだ。

かの人も(かの藤君の方も)、いみじげにのみ言ひわたれども(切実に手引きを求め続けていたけれども)、小侍従もわづらはしく思ひ嘆きて(小侍従も宮の不用意さの負担感に困り果てて)、「かかることなむ、ありし(こういうことがありました)」と告げてければ(と殿に手紙を見られたことを告げたので)、いとあさましく(藤君はとても驚いて)、

「いつのほどにさること出で来けむ(いつ如何してそんなことになったのか)。かかることは、あり経れば、おのづからけしきにても漏り出づるやうもや(こういうことは時間が経つとどうしても素振りなどに出してしまうこともあるのだろうか)」

と思ひしだに(と思っただけでも)、いとつつましく(とても恐ろしく)、空に目つきたるやうにおぼえしを(誰かに見張られているようで目が宙を飛ぶ気がするが)、「ましてさばかり違ふべくもあらざりしことどもを見たまひてけむ(ましてあのように少しも間違えようもない事細かな文面を殿が御覧になったとは)」、恥づかしく(気が引けて)、かたじけなく(申し訳なく)、かたはらいたきに(居た堪れずに)、朝夕、涼みもなきころなれど(晩夏とは言えまだ朝夕に涼みも無い時だったが)、身もしむる心地して(身も凍る気がして)、いはむかたなくおぼゆ(言葉も無い気がします)。

「年ごろ(源氏殿には長年)、まめごとにもあだことにも(仕事でも遊び事でも)、召しまつはし参り馴れつるものをお呼びがあつて親しく参上して来たというのに)。人よりはこまかに思しとどめたる御けしきの(他の人より親身に御思い下さっていた殿の御様子の)、あはれになつかしき

を(有難く懐かしいのを)、あさましくおほけなきものに心おかれたてまつりては(浅はかな身の程知らずと心を隔て置かれ申し上げては)、いかでかは目をも見合はせてまつらむ(とても顔向け申し上げられない)。さりとして(かといって)、かき絶えほのめき参らざらむも(急に全くお伺い申し上げないと言うのも)、人目あやしく(世間が怪しむし)、かの御心にも思し合はせむことのみみじさ(殿御自身も密通を確信なさることになるという不都合さだ)」

など(などと藤君は)、やすからず思ふに(落ち着かずに考えて)、心地もいと悩ましくて(体調もだいぶ悪くして)、内裏へも参らず(御所への出仕も出来ません)。*さして重き罪には当たるべきならねど(政治上の力関係では表向きの身分を失うほどの、さして重い罪に問われずに事を収められそうだが)、身のいたづらになりぬる心地すれば(実際の間人関係では築き上げたものを全て失って、死んだような気がする)、**「さればよ(だから危険は承知の上だった筈だ)」**と(と小侍従が言う宮への情けなさだけでなく)、かつはわが心も(一方では藤君自身の反省もあって)、いとつらくおぼゆ(非常に辛く思われます)。***「さして重き罪には当たるべきならねど」**の文意は注に<姦通罪に相当するが、柏木はそのこと以上に身の破滅、源氏から睨まれ疎んぜられることを恐れる。>とある。表向きだけで考えれば、源氏殿は朱雀院妃との密通発覚で官職を解かれ須磨と明石に流浪したが、藤君は自分の藤原宗家の立場からして、実務上の重責には無い今の六条院源氏殿の立場、およびその妻であり帝の妹宮である女三の宮との密通、ということの政治的な意味に於いては、その発覚に拠っても地位の喪失は避けられる、と読めたのだろう。しかし、身分制度に立つ権力者にとって貴族社会の交友関係は実際の生活の全てであり、それが立ち行かなくなる不始末は人生を失うに等しい。その特権勢力の間人関係の要が源氏殿であって、彼を裏切るとは反対勢力に足場を持たない者にとっては、名ばかりか実に於いても**「死」**を意味し、それで実際に体調を崩したのだろう。ただ、そうであるなら、この密通は正に<重い罪>と言うべきもので、それを**「重き罪には当たるべきならぬ」**という言い方には、それなりの事情説明の補語無しには到底現代語にはならない。

「いでや(いやしかし)、しづやかに心にくきけはひ見えたまはぬわたりぞや(宮は落ち着いて行き届いた配慮があるようには見えなさらなかった相手だったのだ)。まづは(第一)、かの御簾のはさまも(あの御簾事件も)、さるべきことかは(有って良いものか)。軽々しと(軽率だと)、大将の思ひたまへるけしき見えきかし(右大将源君が思っていた様子も分かっていたのに)」

など、今ぞ思ひ合はする(などとも今になって気が付きます)。しひてこのことを思ひさまさむと思ふ方にて(藤君は強いて宮への恋情を褪めさせようと考えて)、あながちに難つけたてまつらまほしきにやあらむ(敢えて宮に難を付け申し上げてみたかったのかもしれない)。

[第三段 源氏、女三の宮の幼さを非難]

「*良きやうとても(良いようでも)、あまりひたおもむきに*おほどかにあてなる人は(あまりに偏ってゆったり構えて身の回りの世話を他人に任せている人は)、世のありさまも知らず(世間知らずで)、かつ(その上)、さぶらふ人に心おきたまふこともなくて(従者に用心なさることも無く)、かく(このように)いとほしき御身のためも(大事な御自身にとっても)、人のためも(相手の男にとっても)、いみじきことにもあるかな(とても困ったことではあるものだ)」 ***「良きやうとても」**は注に<以下「いみじきことにもあるかな」まで、柏木の心中。宮の境遇への同情。>とある。「柏木の心中」は<藤君の内心文>という意味のようだが、「良きやう」などと突き放して冷静に宮や事態を分析する余裕は藤君

には無いだろう。内容も言い回しも、私には源氏殿の内心文に見える。*「おほどかにあてなる人」はくおっとりして上品な人>で、権威体现者の理想的な姿勢としてはそうしたく泰然優雅なさま>が式典で祭り上げられるに相応しい、というのは分かるような気もする。つまり、本来の「泰然優雅」は公的な地位の責任を自覚するという緊張感の上で従者の奉仕を受ける態度、なのだろう。それが形骸化すると、単にく尊大なだけで自主性の無い人任せな日常態度>になりそうだ。そうした貴族像は古今東西を問わず批判的に悲喜劇風に多く描かれている。

と(と殿は)、*かの御ことの*心苦しさも(手紙を置き忘れた宮の至らなさへの殿御自身の管理者保護責任も)、え思ひ放たれたまはず(思わずには居られなさいません)。*「かの御こと」は何を指すのか。密通か懐妊か手紙の不始末か。その全てだとして「御こと」をく宮の御不始末>と言ってしまえば良いのかも知れないが、九章八段の結びは「恋の山路は、えもどくまじき御心まじりける」とあって、此処の文をその続きと読めば、「かの」は「恋の山路」は左て置いても、手紙を放置した幼さというく自覚の無さ>を特に取り上げているような気がする。尤も、もっとざっくり「かの御こと」をく宮の御事情>と言って置けば無難で、「過ち」とか「罪」とか言わずに「こと」と言っていることとも辻褄が合うだろうが、その分、此処にこの文がある意味は見逃すことになる。即ち、この文は、宮の密通は自分の過去に照らしても断罪に当たると考えるものではないが、裏切り自体は許せる筈も無く、心離れはするものの、その幼さを不憫に思う、という殿の心情を示している。それを此処で言う意味は、帝や朱雀院への体裁とは別に、殿が宮自身への気持を整理した、ということを示していて、懐妊という大きな展開要素の存在を正に孕みつつ、話が次の段階に進む前段説明になっている、ということなのだろう。*「心苦し」はく気詰まりだ、気詰まりに思う>で、その気懸かりが対象内容に拠って反省や不快や心配や同情だったりするようだ。此処では「かの御こと」を如何取るかで、この「心苦し」の中身も違ってくるのだろうが、さらにそれが「心苦しさ」という名詞で語られて、その「心苦しさ」が「え思ひ放たれたまはず」と結ばれている。「思ひ放つ」はく思いをきっぱり捨てる。ふりきる。愛想をつかす。また、あきらめる。>と大辞泉にあり、大辞林にはく思いを捨てる。気にかけることをやめる。>とある。つまり、「思ひ放つ」は殿の「思ひ(考え)」を止めるのであり、その「思ひ」が「心苦しさ(気詰まり)」なのだから、「心苦しさ」は宮の自立心の欠如へのく同情>という情緒ではなく、殿自身のく管理責任>という論理と見るべきなのだろう。尤も、この文が藤君の思いだとしたらこの私見は根底から間違っていることになるし、殿の思いだとしても別の解釈も有りそうにも思えて、何れにせよ、どうしてこんなに分かり難い書き方をするのかも不思議なほどの難文だ。

宮は、いとらうたげにて悩みわたりたまふさまの(宮のととても幼げにツワリにお苦しみ為さるさまが)、なほいと*心苦しく(それでもやはり気になって)、*かく思ひ放ちたまふにつけては(このように宮の誠意を諦めなさるについては)、*あやにくに(生憎な事情で失うことになるものに未練を募らせる殿の御性格から)、憂きに紛れぬ恋しさの苦しく思さるれば(裏切りの屈辱にでも消えない宮への恋しさが切なく思えなさって)、渡りたまひて(六条院にお出向きなさって)、見たてまつりたまふにつけても(宮に御会い申しなさるにつけても)、胸いたくいとほしく思さる(胸に迫って愛しくお思いになります)。*「心苦し」は、此処では対象が悪阻に苦しむ宮と具体的で、それをく案じる>という意味だろうし、語用も「心苦しく」と理由説明の連用形で平易だ。*「かく思ひ放ちたまふ」の「かく」とは何を指すのか。意味として最も分かり易いのはく実子を諦める>という事情だが、九章八段に殿のこの宮の密通と懐妊についての煩悶が記されていて、其処にく「いで、あな、心憂や。かく、人伝てならず憂きことを知る、ありしながら見たてまつらむよ」と、わが御心ながらも、え思ひ直すまじくおぼゆる>とあって、以前のように宮を愛せない、という殿の心境が説明されていた。その意を汲めば、「思ひ放つ(思いを絶つ)」はく殿が宮の誠意を断念する一心を隔てずにはいられない>とも読めそうだ。ところで、「心苦し」と「思ひ放つ」という前文と同じ語を、前文とは大分違う意味で使うという作者の意図は何なのか。洒落だとしたら面倒に過ぎる。*「あやにくに」

は注に「源氏の「あやにく」な性癖。」とある。失う段になって執着するのは誰にでもある心理だろうが、母親の早世が影響してか、源氏殿には特にその傾向が強いように描かれて来ているようだ。

御祈りなど(宮の体調回復の御祈りなどを)、さまざまにせさせたまふ(殿はさまざまにさせなさいます)。「おんいのり」はまだ「安産祈願」を謳うには早すぎるのか、もう懐妊は周知されていたのか。この時点ではまだ未定で、食欲増進などの回復祈願くらいを想定して置く。

おほかたのことは(大体のことは)、ありしに変わらず(以前と変わらず)、なかなか労しくやむごとなくもてなしきこゆるさまをましたまふ(表面上はむしろ宮を労り深く丁重に持て成しなざる形を殿は増やしなさいます)。気近くうち語らひきこえたまふさまは(ただし、近付いて親しく語り合いなざることは)、いとこよなく御心隔たりて(やはり非常に殿の御心は宮と離れていて)、*かたはらいたければ(体裁が悪いので同衾するも)、人目ばかりをめやすくもてなして(形だけの共寝で)、思しのみ乱るるに(殿はひとり背を向けて煩悶されるばかりなので)、*この御心のうち*しもぞ苦しかりける(宮の御内心というものはさぞかし辛かったことでしょう)。*「かたはらいたし」は「傍甚し」で「傍目に見苦しい、体裁が悪い」。下に「共寝するも」などが省かれているのだろう。文意は「御心隔たりて」を受けているに違いない。*「この御心」は「こちらの人の御気持」という言い方で「宮の御心」のこと、らしい。*「しも」は強調の副助詞。「ぞ」は強調の係助詞。「苦しかり」は形容詞「苦し」の連用形「苦しく」に形態表示の動詞「あり」が付いた「苦しくあり」の音便。「ける」は蓋然叙述の助動詞「けり」の連体形。

さること見きとも表はしきこえたまはぬに(殿が中納言の手紙を見たとも言い表しなさらぬのに)、みづからいとわりなく思したるさまも(自分のほうから困り果てて黙っていらっしやる宮は)、*心幼し(叱られた子供のように)。*「心幼し」は「心が幼稚である。思慮に欠ける。」と大辞泉にある。が、殿に中納言からの手紙を見られたことは小侍に知らされて宮も分かっている。そして、表面上は丁重でも聞では冷たいという殿の態度を見れば、許しの無いことは明らかで、それは即ち叱責されているに等しく、そう思うこと自体は普通の状況判断で「思慮に欠ける、子供っぽい」という訳ではないだろう。むしろ文意は「さまも心幼し」という言い方が「心幼き御さまも(いとわりなく思したる)」という文の倒置表現で、宮の「子供っぽいさま」を「いとわりなく思したる」と描写している、と取るべきかと思ひ、「わりなく思す」を「困って黙っていらっしやる」と言い換えてみた。私には実感し得ないが、母の自覚を持つ女なら、聞での冷たい態度の夫に泣いて過失の許しを請うとか、気丈なら逆に詰問するなりして、各自の立場をはっきりさせて置かないと子供の養育に支障を来たす恐れがある、ようには思ふ。ただ、そのように自立心の低い宮に対して、どっちつかずの態度を取る源氏殿も打算に生きている、とは言えそうだ。尤も、光る生き方の結果として須磨へ流離し、また強運によって六条院の栄華に至った往年に比して、朝顔姫や撫子を前に次第に光衰えて、藤原右家筆頭を婿に迎えて以降は責任ある生き方として算段を目論む、という今の源氏殿の姿は全体に妙に実相を感じさせる。

「いとかくおはするけぞかし(やはりこんな風でいらっしやるのか)。良きやうといひながら(良いようには言うものの)、あまり心もとなく後れたる(あまりに自立に欠け未熟なのは)、頼もしげなきわざなり(母たるに頼り無いものだ)」

と思すに(とお思いになると)、世の中なべてうしろめたく(世の男女の仲がすべて危うげに見えて)、

「女御の、あまりやはらかに*おびれたまへるこそ(桐壺の女御があまりに柔和で大人しくしていらっしやることの方が)、かやうに心かけきこえむ人は(貴夫人との不義を願い申そうという人には)、まして心乱れなむかし(もっと心掻き立てられるのではないだろうか)。*「おびる」は<内気でおっとりしている。>または<おびえる>と大辞泉にあり、大辞林には<内気でおどおどする。>または<(多く「寝おびる」の形で)ぼんやりする。ぼける。>とある。「おびえる」は「怯ゆ(おびゆ、恐れ震える)」の連用形に見えるから別語源で、「おびる」は「大人ぶ」や「生ふ」などの類語かと見当付けしたが、どうだろうか。

女は、かう*はるけどころなくなよびたるを(女が斯様に出しゃ張らず人に従順でいるようなのを)、人もあなづらはしきにや(男は御し易いと見るのだろうか)、さるまじきに(あるまじきことながら)、ふと目とまり(魔が差して)、心強からぬ過ちはし出づるなりけり(立場を弁えぬ密通を犯してしまうのだろうか) *「晴るけ所」は一般に<気晴らしになること>という語のようだが、此处では「張る気所(気丈な性格、自己主張が強い)」の意味なのだろう。

と思す(と殿はお思いになります)。

[第四段 源氏、玉鬘の賢さを思う]

「右の大臣の北の方の(右大臣夫人である撫子が)、取り立てたる後見もなく(有力な後ろ盾も無く)、幼くより、ものはかなき世にさすらふるやうにて、生ひ出でたまひけれど(幼い時から頼り無い境遇をさすらう運命でお育ちなさったが)、かどかどしく労ありて(才長けて努力の甲斐もあり)、我もおほかたには親めきしかど(私も一応は親代わりを努めたものの)、憎き心の添はぬにしもあらざりしを(自分の女にする色事づくの下心が無いでも無かったが)、なだらかにつれなくもてなして過ぐし(それを上手く受け流して過ごして)、この大臣の(右大臣が)、さる*無心の女房に心合はせて入り来たりけむにも(あの浅はかな女房の手引きに示し合わせて入内前の女の部屋に忍び入って来たことでも)、けざやかにもて離れたるさまを(自分の方ははっきりと遠ざける態度を)、人にも見え知られ(相手にも見知らせて)、ことさらに許されたるありさまにしなして(改めて正式な結婚の形にしてから受け入れて)、*わが心と罪あるにはなさずなりにしなど(自分の気持で帝に御無礼申し上げたのではないと示したことなど)、今思へば、いかにかどあることなりけり(今思えばどんなに賢い遣り方だった事だろう)。*「無心」は「むじん」と読みがあり<考えの浅いこと>と古語辞典にある。ただ、「浅慮」は客観評価と言うよりは話者にとって<不都合なもの>という悪口の語感なのだろう。*「わが心と罪あるにはなさずなり」は<玉鬘は鬚黒大将との結婚をいっさい自分の方には落度がなかったようにした身の処し方を立派であったと、改めて感心する。>と注にある。「わが心」は<自分の意志>で、此处での中身は<右大臣との合意>なのだろう。「罪」は尚侍として出仕することが決まっていたので、その入内前の過ちに対する<責任>なのだろう。つまり冷泉帝への釈明。

契り深き仲なりければ(縁の深い仲なので)、長くかくて保たむことは(長くこうして続くことは)、とてもかくても(どんな経緯があったにせよ)、同じごとあらましものから(同じ結果になったのだろうか)、*心もてありしこととも(女が望んだ結婚だと)、世人も*思ひ出でば(世間の人が思い始めれば)、すこし軽々しき思ひ加はりなまし(少し軽々しい印象が加わるだろうから)、いといたくもてなしてしわざなり(本当に上手に身を処したものだ)と思し出づ(と殿はお考えになります)。*「心もてありしこと」は<自分の方から望んでおこなったの意。結婚における女性の態度は主体的

よりも受動的な身の処し方をよしとした。>と注にある。どうやら殿は、撫子が姫宮のように軽率ではない、と評価しているようだ。が、撫子が特に男扱いに長けていた、などということは有り得ない。田舎育ちで、むしろ社交事には晩生だった筈だ。ただ、源氏殿がこういう言い方をしたい心理は分かるような気もする。殿の算段では、撫子は冷泉帝に入内させようとしたのだし、本人もその気で現に尚侍に就いた。だから、藤原右家惣領は横恋慕だった。が、撫子の実父である左家藤原殿は本家実娘の弘徽殿女御を立てる立場から、右家の結婚申し出に乗った。藤原両家が手を結んでは、その主導権争いの反目均衡の上に立って優位性を示していた源氏殿の威光はあっさり消えて、殿も帝も、いわんや撫子も両家の意向に従う他は無かった。つまり、正面から押し切られたのだが、その表沙汰ぶりに却って殿は諦めが付いた、というところだろう。冷泉帝という殿の影響範囲内に撫子を引き止めて色絡みを後に引きずる、という事が出来なかったのが、逆に幸いして殿は余計な心労を抱えずに済む結果となったワケだ。スッキリしている。それに引き換え、姫宮のことは殿にとって非常に都合が悪い。むしろ後に引けない立場に立たされてしまっている、という逃げ場の無い不快な事態だ。まあ、光の衰えにそれこそ自覚が無く、よって情況の客観分析も甘く、よって自制も利かぬままに姫宮を引き受けた、という自分で蒔いた種ではあるが。 *「思ひ出づ」は<思い出す>と古語辞典にあるが、過去を思うというよりは<考え始める>という言い方に見える。

[第五段 朧月夜、出家す]

二条の尚侍の君をば(二条の実家に戻り住む朱雀院の尚侍の君のことを)、なほ絶えず(源氏殿は今もいつも)、思ひ出できこえたまへど(思いを寄せ申しいらしたが)、かくうしろめたき筋のこと(この三の宮の不義の事を)、憂きものに思し知りて(辛いものだと言われた者の立場で思い知りなさって)、*かの御心弱さも(この人が殿の劣情に応じなされた情のよろさを)、少し軽く思ひなされたまひけり(少し軽率なようにお思いになったのです)。 *「かのみこころよわき」は、尚侍が殿の誘いに乗ったこと、らしい。「心弱し」は<気が弱い>の他に<情にもろい>と大辞林にある。

つひに御本意のことしたまひてけりと聞きたまひては(とうとう尚侍が念願の出家を果たされたとお聞きなされると)、いとあはれに口惜しく(殿はととも感じ入って残念で)、御心動きて(動揺してじっとしていらっしやれずに)、まづ訪らひきこえたまふ(さっそくお見舞いのお手紙を申し上げなさいます)。今なむとだににはほはしたまはざりけるつらさを(これから出家するとだけでも匂わし下さらなかった薄情さを)、浅からず聞こえたまふ(しみじみ訴え申しなさいます)。

「海人の世を よそに聞かめや 須磨の浦に 藻塩垂れしも 誰れならなくに (和歌 35-17)

「わたしは須磨で泣いたのに あなたは澄まして去って行く (意識 35-17)

*注に<源氏から朧月夜尚侍への贈歌。出家を聞いて贈る。「尼」に「海人」を掛ける。>とある。「よそに聞く」は<他人事として聞く>。「聞かめや」は「聞かむ」の反語で<聞く事があるだろうか>。「たれならぬ(ず)」は<他の誰でもない>。「ならなくに」は<～ではないのだから>。「誰れならなくに」は<他の誰でも無いのだから>という言い方で、此处では舌足らず気味だが<他ならぬあなたの所為だったのだから>という意味らしい。

さまざまなる世の定めなさを心に*思ひつめて(いろいろな世の移ろいを心に思い重ねて年を取って来て)、今まで後れきこえぬる*口惜しさを(今に至るまで出家に後れを取り申したというのは悔しいものなので)、*思し捨てつとも(あなたは私をお見捨てになっても)、*避りがたき御回向のうちには(捨て切れない修行として日々の念仏行の終わりに唱えなされる御回向願文

の功德を授かる衆生の内の一人としては)、まづこそはと(ともかく私も含まれるだろうと)、あはれになむ(せめて願う所です) *「おもひつむ」は「思ひ積む」で<思いを重ねる>。年を重ねる、に掛けた言い回し、かと思う。 *「口惜しさを」の「を」を文末感嘆詞と見て<悔しいものだ>と読んでも良さそうだが、「あはれになむ」を説明する接続助詞と読むほうが全体のまとまりは着く気がする。 *「おもひすつ」は<見捨てる>だが、入信して<世俗を絶つ>ことに掛けた言い回しなのだろう。 *「さがりたし」は<避けられない>だが、「思し捨つ(見捨て為さる)」の対語として<捨て切れない>と洒落ているのだろう。しかし、文意としては「思し捨つ」の方が洒落語用で、「避り難し」は<必ず唱えることになっている>という意味で「おんゑかう」を修辞している、ようだ。「回向」は「回向文(ゑかうもん)」のこたらしく、「回向文」は<日常の勤行(ごんぎょう)や法会(ほうえ)の終わりに、修めた功德を一切衆生(いっさいしゅじょう)に振り向けるために唱える願いの経文。>と大辞泉にある。

など(などと殿は恨み言を)、多く聞こえたまへり(多くお書きなさいました)。

*とく思し立ちにしことなれど(尚侍は出家を朱雀院の御出家当初から早くに思い立ちなさっていたことだったが)、*この御妨げにかかづらひて(源氏殿の御反対に引かれて思い止まっていた)、*人にはしか表はしたまはぬことなれど(朱雀院にははっきりとは打ち明けなさらなかったことだが)、心のうちあはれに(心中では感慨深く)、昔よりつらき*御契りを(昔から問題のある殿との御情交を)、さすがに浅くしも*思し知られぬなど(やはり院は気にいらした事など)、かたがたに思し出でらる(出家した今にして、それぞれの御方の事が懐かしく思い出されなさいます)。 *「とく思し立ちにし」の主語は尚侍らしい。なお、「疾く」は<朱雀院の御出家早々に>。 *「この」は<源氏殿の>ということらしい。 *「ひと」は広く<他人>と訳されているが、私は<朱雀院>と読んで置きたい。また、「かたがた」は<殿と院>なのだろう。特に丁寧な敬語が無いのも男女の三角関係という事情だったから、かと思う。 *「おんちぎり」は<殿との情交>。 *「思し知られぬ」の主語は朱雀院。

御返り、今はかくしも通ふまじき御文のとちめと思せば(お返事は、今となってはもうこのようなお手紙のやりとりをしてはならない最後とお思いになると)、あはれにて(尚侍は感慨深く)、心とどめて書きたまふ(心を込めてお書きなさいます)、墨つきなど(墨の色具合など)、いとをかし(とても趣き深い)。

「常なき世とは身一つにのみ知りはべりにしを(無常の世と思うのは私一人だけかと思っていましたのに)、後れぬとのたまはせたるになむ(あなたも出家に後れを取ってしまったと仰るようですが)、げに(実際には)、

海人舟にいかがは思ひおくれけむ、明石の浦にいさりせし君 (和歌 35-18)

とづくにあなたは海人宿り、明石の浜で貝漁り (意識 35-18)

*注には<朧月夜尚侍の源氏への返歌。「海人の世」「須磨の浦」の語句を受けて「海人舟」「明石の浦」と返す。「あま」に「尼」と「海人」を掛ける。「いさり」は漁りの意だが、裏に明石君との結婚をこめるか。『完訳』は「流離の真意は明石の君との邂逅にあったと切り返す」と注す。>とある。

*回向には(回向願文は)、あまねきかどにても(全ての人の為のものですから)、いかがは(ご心配なく)」とあり(とありました)。 *注には<『集成』は「あまねきかど」は「普門」をそのまま和らげ

たもの。「是の觀世音菩薩の自在の業、普門示現の神通力を聞かむ者は、当に知るべし、是の人は功德少なからじ」
（『法華經』觀世音菩薩普門品第二十五）」と注す。>とある。この「普門品」が回向文なのだろうか。

濃き青鈍の紙にて(手紙は濃い青ねずの紙で)、*檜にさしたまへる(シキミの枝に挿してあります)、例のことなれど(入道者の普通の差し出し方だが)、いたく過ぐしたる筆づかひ(とても優れた筆遣いは)、なほ古りがたくをかしげなり(今だに衰えず風情があります)。 *「檜」は<シキミ>という植物で<シキミ科の常緑小高木。山林中に自生。葉は互生し、長楕円形でつやがある。4月ごろ、黄白色の花をつける。果実は有毒。葉から抹香をとり、また仏前に枝を供える。仏前草。はなのき。こうしば。こうのき。しきび。>と大辞泉にある。

[第六段 源氏、朧月夜と朝顔を語る]

二条院におはしますほどにて(殿は二条院にいらっしゃる時のことで)、女君にも(夫人の紫の上にも)、*今はむげに絶えぬることにて(相手の出家で今はすっかり終わってしまった恋文だったので、須磨流浪で寂しい思いをさせた妻にも少しは関係を説明するべきかと)、見せたてまつりたまふ(尚侍の手紙をお見せ申し上げなさいます)。 *「今はむげに」の「無下に」は<それ以下の無いほどに>という言い方で、語用としては<全く～しない>という意味のようだ。ところで、「今は」は<尚侍が出家した今となっては>ではあるが、かと言って、以前から紫の上には何の関わりも無い他所の女のことを、此処で敢えて知らせる意味も動機も殿には無い筈だ。尚侍は殿の須磨流浪の原因になった女、というか、主原因は殿の方にあるが、密通発覚事件の相手であり、その発覚によって殿は公職追放されて、紫君は寂しく二条院で留守居したのだから、直接には見知らないが、紫上にとっても尚侍は因縁のある女だった。だから、尚侍が出家してもう愛人関係足り得ない今になって、幾らかは客観性が担保されるものと、殿は上に幾らかの事情説明責任を果たそうとした、のだろう。些か蛇足気味の感はあるが、この女の手紙を妻に見せるという珍しいこと、に至るこうした事情背景は重要だろうと補語する。

「いといたくこそ*恥づかしめられたれ(いやどうにもきまりの悪いものです)。げに(実際に)、心づきなしや(お見せする心算は無かったものですから)。 *「恥づかしめらる(恥ずかしい目に遭う)」のは源氏殿だろうが、誰に対してかと言えば、尚侍にではなく話し相手の紫上に、なのだろう。これは、手紙を「見せたてまつりたまふ」ことが殿と尚侍の関係を上に説明することで、それを此処で言うこと自体が殿には<きまり悪い>のだ。「げに心付き無しや」も同様場面の弁だろう。

さまざま心細き世の中のありさまを(私と朱雀院の尚侍との仲は、いろいろと不安のあった朝廷補佐の実務のあれこれを)、よく*見過ぐしつるやうなるよ(よく打ち合わせて仕えて来たというものなのです)。 *「見過ぐす」は敬語が無いので主語は殿、または殿と尚侍、なのだろう。で、「見過ぐす」は<見逃す、放置する>の意味でも使うが、此処では「よく(念入りに、十分に、上手く)」と高低評価で修辭されているので、この「見」は「世の中のありさま」を<見計らう、分析する、世話する、処理する、扱う>などの意で、「過ぐす」は<年を経る>で、「見過ぐす」は<上手く調整して長年面倒を見る>くらい言い方、と取って置く。ということは、この殿の弁は紫の上を説得する意図を持って語られているのだから、本来は「見過ぐす」のは夫婦関係そのものなので、この「世の中のありさま」はどうやら公務を意味していて、「やうなる」は帝に仕える同僚としての協力業務に当たっていた<関係だ>と、殿と尚侍の仲を紫上に説明している弁明に見えて来る。そう言えば、九章八段に「宮仕へといひて、我も人も同じ君に馴れ仕うまつるほどに、おのづから、さるべき方につけても、心を交はしそ

め、ものまぎれ多かりぬべきわざなり」という殿の思考文があり、何だか妙に取って付けたような理屈の印象だったが、そうか、殿はこの尚侍との関係を念頭に宮の密通の意味を逡巡していたのか。しかし、だとしたら、この弁明はほとんど嘘だ。少なくとも核心を突いていない、というか、意図的に逸らしている。殿が尚侍を抱いた動機は、相手が誰かともはっきりしないままに、藤原右家の姫への興味から遊び半分で手を出したのだ。それが意外に、気の利いた好い女だったので尾を引いた、というのが真相だ。確かに、その女が実は朱雀帝の尚侍で、尚侍も殿と帝の間で揺れ動いたし、殿が中央復帰してからはそれぞれの立場で朝廷を補佐し合っただろうし、朱雀帝の退位後も尚侍は弘徽殿大后の立場を実質的に次いで、藤原右家の重しの役割を担っていた面もあったかに思うが、それらは全て後付で、源氏殿の尚侍への核心的興味はその女っぷりの好き、に他ならない。が、それはそれとして、殿がこう言っている以上、その文意に基づいて言い換えてみる。とは言え、「世の中の有様」が何を指すのかは曖昧で、この私見はとんでもない読み間違えかも知れない。例えば、「いといたくこそ恥づかしめられたれ」も流浪時代の不遇の怨み節で、この文も当時は若気の至りでくいろいろな政治情勢に気付かなかった>みたいな意味という可能性もありそうだ。ただ、だとしたらあまりにも唐突な話し方に思うが、文意としてはそれも成立しそうなほど、焦点の合わない難文だ。

なべての世のことにてても(公務を離れた一般の世の中のことについてでも)、はかなくものを言ひ交はし(雑談を交わして)、時々によせて(四季折々の挨拶文で)、あはれをも知り(近況を知り)、ゆゑをも過ぐさず(情緒も感じて)、よそながらの睦び交はしつべき人は(当家以外の人で親しく手紙を交わす女は)、齋院とこの君とこそは残りありつるを(齋院とこの尚侍の君だけが続いていたのだが)、かくみな背き果てて(このように皆が出家してしまつて)、*齋院はた(齋院はまた)、いみじうつとめて(とても熱心に)、紛れなく行なひにしみたまひにたなり(一心に勤行に精進していらっしやるらしい)。 *「齋院はた」は注に<朝顔齋院の出家はここに初めて語られる。>とある。

なほ(やはり)、ここの人のありさまを聞き見る中に(多くの女の生涯を見聞きする中で)、深く思ふさまに(思慮深い態度で)、さすがになつかしきことの(それでいて心優しい点で)、*かの人の御なずらひにだにもあらざりけるかな(あの齋院に並び立つほどの人は他にいないようだ)。女子を生ほし立てむことよ(その齋院が独身を貫きなさつたということは、女子を育て上げるということの)、いと難かるべきわざなりけり(如何に難しいことだろうか)。 *「かの人」は注に<朝顔齋院をさす。>とある。

宿世などいふらむものは(宿命などというものは)、目に見えぬわざにて(目に見えないので)、親の心に任せがたし(親の意向に沿うものではない)。生ひ立たむほどの心づかひは(しかし、一人前になるまでの教育は)、なほ力入るべかめり(やはり親が熱心に導くべきだ)。

よくこそ(よくも私は)、あまたかたがたに心を乱るまじき契りなりけれ(多くの女子の養育に悩まなくて済んだ運命だったものだ)。年深くいらざりしほどは(年を取らずに居た若い頃は)、さうざうしのわざや(女の子が少ないことを、物足りないものだ)、さまさまに見ましかばとなむ(いろいろな子が居たならと)、嘆かしきをりをりありし(嘆いた時々も有つた)。

*若宮を(孫の内親王を)、心して生ほし立てたてまつりたまへ(あなたは気に掛けて育て申して下さい)。 *「若宮」は<明石女御所生の女一の宮をさす。>と注にある。

女御は、ものの心を深く知りたまふほどならで(女御はまだ物の分別を深くお知りにならないお年で、かく暇なき交らひをしたまへば(あのようによく忙しく宮仕えをなさっている)、何事も心もとなき方にぞものしたまふらむ(子育てについては何かと行き届かない面もおありでしょうから)。

御子たちなむ(内親王たちは)、なほ飽く限り人に点つかるまじくて(やはりどこまでも人に欠点を付けられないようにして)、世をのどかに過ぐしたまはむに(一生を穏やかに過ごしなさいますように)、うしろめたがるまじき心ばせ(心配の無いような配慮を)、つけまほしきわざなりける(して置きたいものです)。限りありて(身分の限りのある)、とざまかうさまの*後見まうくるただ人は(それなりの夫を頼るような臣下の者は)、おのづからそれにも助けられぬるを(当然それらの伴侶に面倒を見てもらうのだろうが) *「うしろみ設くる」は<夫に頼る>。

など聞こえたまへば(などと殿が申しなさると)、

「はかばかしきさまの御後見ならずとも(たいしたお世話は出来ませんが)、世にながらへむ限りは(私が生きている限りは)、見たてまつらぬやうあらじと思ふを(お育て申し上げたく思います)、いかならむ(いつまで出来ますやら)」

とて(と言って紫の上は)、なほものを心細げにて(今でも心細そうに)、かく心にまかせて(尚侍や齋院のように思うままに)、行なひをもとどこほりなくしたまふ人びとを(勤行を余念無く為さっている人びとを)、うらやましく思ひきこえたまへり(羨ましく思い申しなさいます)。

「尚侍の君に(かんのきみに)、さま変はりたまへらむ装束など(尼装束など)、まだ裁ち馴れぬほどは訪らふべきを(まだ数少ないだろうから見舞いに差し上げたいが)、袈裟などはいかに縫ふものぞ(袈裟などは如何作ればいいのか)。それせさせたまへ(それを作って下さい)。

一領は(ひとくだけは、もう一揃いは)、*六条の東の君にもものしつけむ(花散里の君に作らせよう)。うるはしき*法服だちては(あまりに正規の法衣立ったものでは)、うたて見目も*けうとかるべし(さぞかし見た目が興醒めだろう)。さすがに(その辺の所を)、その心ばへ見せてを(上手く工夫してくれ)」 *「ろくでうのひんがしのきみ」は<花散里の君>。花散里は王家の仕来たり作法に詳しい。式典自体の設営や進行は専門の業者として式部省の役人が心得ているだろうが、花散里は所作や装束に於いて、何が基本で何処に工夫を施すべきかを弁えている人なのだろう。 *「ほふぶくだつ」は<いかにも法衣らしい>なので、「うるはし」は<美しい>ではなく<完全な→整然とし過ぎた>という意味らしい。 *「けうとし」は「気疎し」で<疎ましい、目障りだ、興醒めだ>。

など聞こえたまふ(などと殿は上に申しなさいます)。

青鈍の一領を(あをにびのひとくだけを、青ねず色の法衣一組を)、*ここにはせさせたまふ(紫の上は作らせなさいます)。 *「ここには」は<ここ二条院に於いては>で、つまりは<紫の上は>だ。

*作物所の人召して(殿は御所の調達係の者を呼び寄せて)、忍びて(私用で)、尼の御具どもの*さるべきはじめのたまはす(尼の道具類の差し当たって必要な幾つかのものをご用命なさいま

す)。御茵(おんしとね、御敷布団)、上席(うはむしろ、上布団)、屏風(びやうぶ)、几帳(きちやう)などのことも(などの用具も)、いと忍びて(ごく内々に)、*わざとがましくいそがせたまひけり(特に命じて用意させなさいました)。 *「作物所」は「つくもどころ」と読みがある。「つくもどころ」は「つくりものどころ」の約>と古語辞典にあり<蔵人所の所管で宮中の諸調度を調達する所。>と説明がある。 *「さるべきはじめ」は<然るべき差し当たってのもの>だろうか。 *「わざとがまし」は<特命して>だろうか。この人が朱雀院の尚侍だったからなのか。であれば、「忍びて」が分からない。何が言いたいのか分からない文だ。